

直腸がん治療の先端「経肛門手術」



徳大病院 100例に到達

徳島大学病院が2017年から取り組む直腸がんの先端手術「経肛門手術」(TAME)が100例に達した。中四国地区では初めてで、全国トップレベルという。従来の腹部に加え、患部に近い肛門からも内視鏡で手術するため、時間短縮に加え肛門機能を維持できる可能性が高まり、患者の負担軽減につながっている。

全国有数 時短・リスク減

病院によると、従来の直腸がん手術は腹部から内視鏡や器具を挿入し、モニターで確認しながら悪性腫瘍を切り取っていた。骨盤の奥にある直腸の手術は狭い

直腸がんの先端手術「経肛門手術」を行う様子(徳島大学病院提供)

場所での作業となり、患部までの距離も離れている。腫瘍の位置を把握しづらい上、前立腺や神経など他の部位を傷つけるリスクがあった。経肛門手術では、肛門からも内視鏡と器具を使って同時にアプローチする。腫瘍との距離を正確に測れる

ため切除する範囲を最小限にとどめられ、肛門機能の維持に必要な筋肉を残しやすくなる。患者からは「術後の生活の質が高まる」と好評だ。

消化器・移植外科の島田光生教授が17年に学会発表を見て経肛門手術の導入を決め、同科の医師が海外の医師を招いた講習や国内研修を通して技術を習得した。17、18年の手術はいずれも11件。19、20年は30件、31件と伸ばした。今年は8月末までに19件。累計102件となった。県内の研究会での発表をはじめ、各病院への訪問や資料配布の他にもあって県内を中心に患者が増えた。

手術には肛門側の2人と合わせて医師5人が必要となるものの、5〜6時間の手術が約半分で終わる。病院は「短時間なので注力

が高いうちに終わる」と強調する。腹部からの手術に支援ロボット「ダウインチ」を使う場合は4人態勢ででき、今後は肛門側の内視鏡を取り扱うロボットの導入も目指す。

島田教授は「直腸がんの手術は難しいが、経肛門手術の導入で確実に安全にがんを取れるようになり、根治性が高まる。地方の大病院で大都市のトップレベルと変わらない高度な医療を提供したい」と話している。(南志郎)